

文学教材の全体構造

ーコミュニケーションモデルの一提案ー

キーワード：国語科教育 構造 第三項理論

広島大学大学院・院生 渡邊皆仁

1. 問題の所在

国語科教育学研究では、文学教材の構造についての研究が行われてきた。

文学教材の構造研究には、部分構造についての研究と全体構造についての研究がある。

部分構造についての研究には、例えば、山元 (2005) がある。山元は、イーザーの理論における「呼びかけ構造」の考え方を基にして、文学教材の構造について措定したが、作品全体ではなく、作品の部分についての構造について述べている。

これに対して、全体構造についての研究には、例えば、田近 (1993) や浜本 (1988) がある。田近は、バルトの構造分析の知見を援用して、文学教材の構造を「物語内容」と「表出内容」との二重の構造であると措定した。田近によれば、「物語内容」は、「細部」に関わる「状況」「人物」「事件」と、「全体」とに関わる「展開」という要素で構築される。また、「表出内容」は、「視点」と「語り」という要素で構築される。田近は、全体構造が読者の読みに作用を与えることを説明した。

また、浜本は、文学教材の構造を、[(Aは) + (Xに出会って)] + [(Yのとき) + (Bする)] という形で措定した。浜本は、全体構造の内部に読者が参与する余地を示すことで、全体構造が読者の読みに作用を与えるメカニズムを説明した。

これら文学教材の構造研究は、それぞれの知見から文学教材の構造を措定することで、文学教材を用いた授業で学習者は何を学ぶのか、文学教材を深く読むとはどういう行為か、といった問いに答えようとしてきた。特に、文学教材の全体構造についての研究では、文学教材がテキストという大きな単位として機能する場合における、教育作用を明らかにしようとした。

論者は、今まで、第三項理論という文学理論/文学教育理論を検討してきた (渡邊 (2018) など)。渡邊 (2018) では、語り手の語りを超えた物語空間を読者が構造化して読むことで、読者の読みの過程に「自己倒壊」という教育作用が起こると説明した。

第三項理論において展開される語り手を超えた領域を措定する考え方は、文学教材の全体構造研究の先行研究 (例えば、田近 (1993) ・浜本 (1988) ・西郷 (2008) ・難波 (1995) ・松本 (1997) がある) には見られない。そこで、国語科教育における文学教材の構造論をさらに発展させるために、第三項理論の構造論についても検討する必要があるだろう。

しかし、第三項理論の構造論に基づいた、文学教材構造については、必ずしも明らかではない。中村 (2012) では、第三項理論の構造論に関連して、具体作品 (「白いぼうし」など) について、「関係相関図」が作成されている。また、『(国語教育) とテキスト論』では、第三項理論とテキスト論を軸とした座談会が行われた。この座談会において、「語りの図式」という語りに着目した構造図が作成され、第三項理論の構造論の解明が試みられた。しかし、これら先行研究の構造図は、物語空間を語る語り手のさらにメタレベルに語り手を措定するという語りについての図式に留まり、第三項理論における他者論を踏まえたものになっていないという点で不十分なものであった。

これに対して、渡邊 (2018) では、第三項理論の全体構造について、一定の成果を得ることができたが、第三項理論の全体構造と、国語科教育学における先行研究の全体構造との違いについては言及できていない。

そこで、本論では、国語科教育学における全体構造研究の知見を基にして、第三項理論の構造論について、より精緻な検討を行い、これを文学教材構造図によって明示化する。

2. 研究の目的と方法

以上の問題意識を踏まえて、本論では、第三項理論における構造論を国語科教育の文学の読みの理論として扱うために、まず、第三項理論の構造論について明らかにする。具体的な方法としては、第三項理論の提唱者である田中実の言説から、抽象的な文学教材構造図を作成し、これによって第三項理論の構造論を説明

する。構造図の作成に当たっては、国語科教育学の先行研究の知見から、構造図の枠組みを設定し、これに基づいて作成する。

3. 先行研究から考える文学教材構造図の基本要件

国語科教育学では、文学教材の構造を分析することが増して、読者が文学教材をどのように構造化して読むのかが重要な関心事とされてきた。このため、国語科教育学研究では文学教材の構造を、その教材のテキスト構造を示すだけにとどまらず、以下で示すように、読者を組み込んだモデルで考えてきた。

先述した浜本の全体構造論も、読者による解釈の余地を含んだものとして構造化されていた。文学教材の構造に読者を含みこむ考え方は、文学教材の構造をコミュニケーションモデルで捉えるという考え方にまで発展した。文学教材の構造をコミュニケーションモデルとして捉える論には、例えば、西郷 (2008)、難波 (1995)、松本 (1997) などがある。

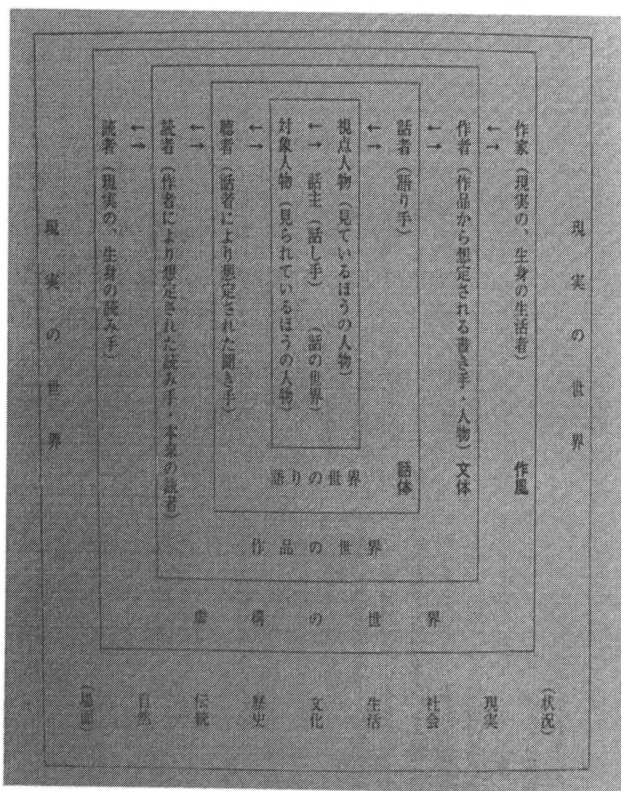


図1 西郷 (2008, p. 9) における文学教材構造図

西郷における文学教材構造図は、「視点人物 (見ているほうの人物)」・「対象人物 (見られているほうの人物)」・「話主 (話し手)」の属する「話の世界」と、「話者 (語り手)」・「聴者 (話者により想定された聞き手)」の属する「語りの世界」と、「作者 (作

品から想定される書き手・人物)」・「読者 (作者により想定された読み手・本来の読者)」の属する「作品の世界」と、「作家 (現実の、生身の生活者)」・「読者 (現実の、生身の読み手)」の属する「虚構の世界」と、その外縁である「現実の世界」によって構造化されたモデルである。このそれぞれの世界は、順に入れ子型になっている。また、構造図には、読者の移動を示す矢印が書き込まれている。

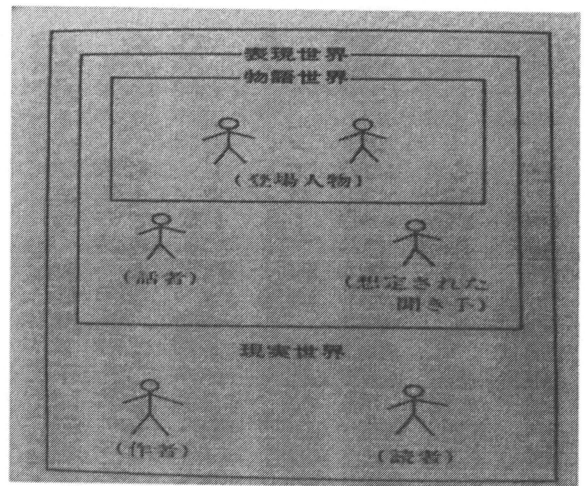


図2 難波 (1995, p. 184) における文学教材構造図

難波は、井島 (1993) の物語分析の枠組みを援用して、文学教材の構造を、「現実世界 (作者と読者との世界)」、「表現世界 (物語る世界、語り手 (話者) と内含された読者との世界)」、「物語世界 (物語られる世界)」の三つの世界が構造化されたものとして図示した。

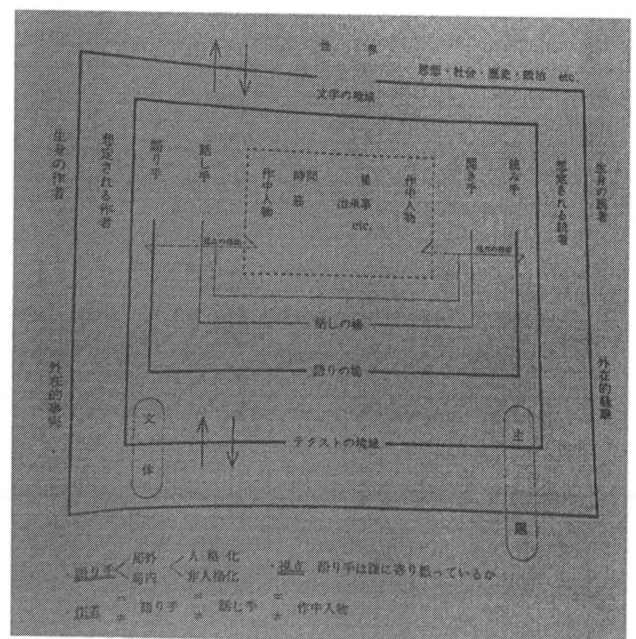


図3 松本 (1997, p.150) における文学教材構造図

松本の文学教材構造図では、登場人物のいる物語空間と、「話し手」と「聞き手」がいる空間と、「語り手」と「読み手」がいる空間と、「想定される作者」と「想定される読者」がいる空間と、「生身の作者」とそれに対応する「生身の読者」がいる空間とが存在し、これらが順に入れ子型になっている。

図1から図3のように、文学教材の構造を、コミュニケーションの場として捉えることは、次のような利点があると考えられる。文学教材構造図を用いると、読みにおける学習者は、読者として虚構の世界に参入し、様々なコミュニケーション主体の位相に立つことで、コミュニケーションの場を構築すると考えることができる。つまり、読者の読みの過程を構造図上のコミュニケーション主体に重なる形での移動として捉えることができる。また、それぞれのコミュニケーション主体相互の関係、それぞれの場相互の関係についても考慮することができる。

本論では、こういったコミュニケーションモデルの利点を考慮して、上述した図1から図3までを参照して、文学教材構造図の基本要件を設定することにする。

これら図1～3の文学教材構造図を基に、文学教材構造図の基本要件として、次の二点を取り出した。

- ①構造は、送り手と受け手のコミュニケーションの場として構築される。
- ②構造は、物語世界（語られた出来事であり、出来事の内にいる登場人物たちによって構築される場）、表現世界（語りが行われる場であり、語り手と聞き手によって構築される場）、虚構世界（作品空間の外縁であり、虚構の作者と虚構の読者によって構築される場）、現実世界（作品形成・享受が行われる場であり、現実の作者と現実の読者によって構築される場）というコミュニケーションの場の重なりである。

①と②の内容を踏まえて、文学教材の基本構造を示したものが以下の図4である。

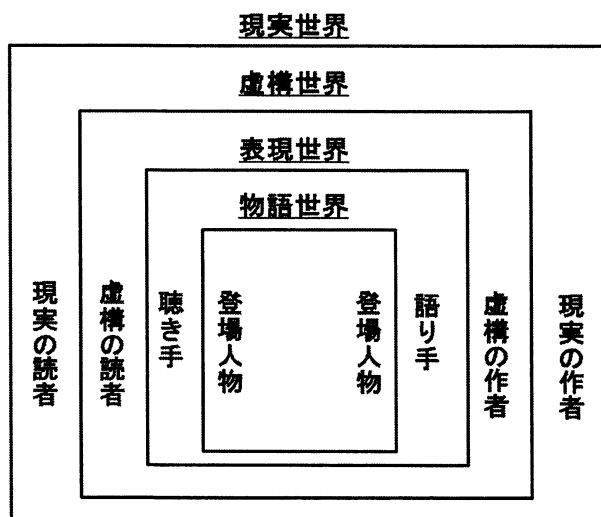


図4 文学教材の基本構造モデル

図4の物語世界は、語られた出来事であり、出来事の内にいる登場人物たちによって構築される場である。次に、表現世界は、語りが行われる場であり、語り手と聞き手によって構築される場である。また、虚構世界は、作品空間の外縁であり、虚構の作者と虚構の読者によって構築される場である。さらに、現実世界は、作品形成・享受が行われる場であり、現実の作者と現実の読者によって構築される場である。これらの場が重層化されたものとして、文学教材の基本構造をモデル化した。

4. 第三項理論から考える文学教材の構造

ここでは、先行研究の知見から作成した文学教材の基本構造図を踏まえて、第三項理論の構造論において、文学教材の構造がどのように指定されているのかについて、明らかにしていく。

まず、第三項理論の構造論について、第三項理論の提唱者である田中実の言説から探っていく。

第三項理論における構造論は、田中の言説において、「近代小説」という小説の中の一つのジャンルとして説明されている。そこで、「近代小説」に関する言説を基に、第三項理論の構造論について考察する。

田中は、「近代小説」を論じる際に、「〈わたしのなかの他者〉」と「了解不能の《他者》」とを峻別することを重要な約束事としている。田中(2001)によれば、「〈わたしのなかの他者〉」とは、「〈わたし〉が捉え、理解した他者」(p.59)のことである。これに対して、「了解不能の《他者》」とは、「〈わたしのなかの他者〉」の外部の到達不可能な存在、あるいは

〈わたしのなかの他者〉を露わにする絶対性のこと」(p.59)である。

この二つの他者概念の峻別が、田中の諸論考において繰り返し論じられてきたのは、他者が、「近代小説」の根底にある問題に関わるからである。田中(1999)は、次のように述べる。

主体が対象を捉えた瞬間、対象化された対象は自己化された〈他者〉、〈わたしのなかの他者〉と化し、そこには文字通りの〈他者〉としての他者性が喪失されていくことである。〈わたし〉という主体に対峙した「異質な他者」=〈他者〉を想定し、これを認識しようとしても、それだけでは〈他者〉は〈自己化〉されるのである。これらの難問こそが克服されるべき世界と考えている。(p.257)

この田中の言説によれば、「近代小説」の根底にある問題意識は、次のようになる。

主体の捉えた他者は、自己内他者でしかない。あるいは、他者は主体に対して、自己内他者としてしか現象しないという問題である。いいかえれば、客体が主体の捉えた客体としてしか現象しないという世界の成り立ち方の問題である。

客体が主体の捉えた客体としてしか現象しないという原理は、田中の言説において、文学教材にも適応されている。これを先ほどの、文学教材の基本構造図で考えてみる。

物語は、語り手の視角によって語られている。また、語り手は語りにおいて、ある特定の登場人物の視角から(視点人物の視角から)語るとする方法をとる。語り手によって語られた物語は、視点人物や語り手の視角によって、見られたあるいは語られた物語(自己内の物語)である。つまり、表現世界で聞き手に語られる物語は、全て語り手によって自己化された物語であるということである。これを図5に示した。

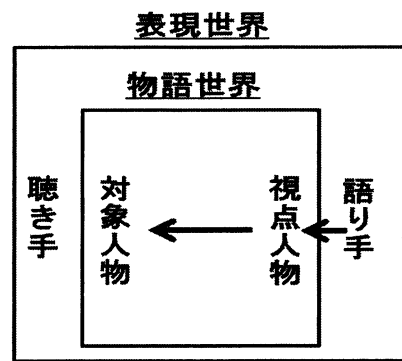


図5 表現世界

図5では、誰の視角から見ているのか、語っているのかについて、矢印で示した。(以降の図における矢印は、これと同様の意味で用いている。)物語世界では、視点人物の視角から対象人物が捉えられている。また、この物語世界は、表現世界にいる語り手の視角から語られている。対象人物は視点人物の視角から捉えた対象人物であり、物語は、語り手の視角から語られた物語なのである。

ここまでのことを、まとめれば、「近代小説」は、語ることは主体の捉えた客体を語ることでしかないという問題意識をもってつくられているということである。

この、語ることに、主体の捉えた客体を語ることでしかないという問題意識をもってつくられている「近代小説」が直面したのは、読者に、語り手の語る物語とその語り方を如何に相対化させるかという課題である。

この課題に対して「近代小説」は、視点人物や語り手の視角から構築される物語の外部に、対象人物の視角から構築される物語を描き出すという手法がとられることになった。これについて、田中(2016)は、次のように述べる。

〈近代小説〉は視点人物が捉える対象人物の外部、その〈向こう〉を対象人物の内側から語り、その双方の人物の相関のカタチを描き出すことで成り立つ、「客観描写」を要請されていますが(略=渡邊)(p.7)

〈語り—語られる〉相関に現れる、視点人物と対象人物の隠れている落差、そこに了解不能の《他者》を浮上させると、〈近代小説〉のアポリア、「客観描写」が実現します。(p.13)

「近代小説」では、語り手の語る物語を相対化するために、語り手の語る物語世界、表現世界の外部に、対象人物の視角から構築される物語を組み込んで表現するという手法がとられたのである。田中の言説において、「〈わたしのなかの他者〉」と「了解不能の《他者》」の峻別が重要な約束事とされていたのは、「近代小説」の成立には、語り手の語りの外部、「了解不能の《他者》」の領域が要請されているからである。さらに、語り手の語る物語の外部に、「了解不能の《他者》」の物語、いいかえれば、対象人物の視角から構築される物語を読むことができるように表現されており、これを読者が読むことが「近代小説」というジャンルを鑑賞する方法だったからである。

「近代小説」では、語り手の語る物語を相対化するために、語り手の語る物語世界・表現世界の外部に、対象人物の視角から構築される物語を組み込んで表現するという手法がとられた。対象人物の視角から構築される物語世界について、図6に示した。

物語世界②

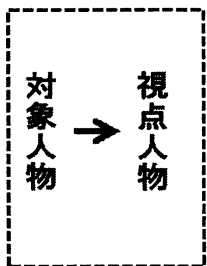


図6 物語世界②

図6では、対象人物の視角から構築される物語世界を、視点人物や語り手の視角から構築される物語世界と分けるために、前者を物語世界②と表記している。物語世界②は、対象人物の視角から見た物語である。

(後述するが、この物語世界②は、語り手を超える聴き手になった読者によって初めて構築されるという特徴から、その領域を破線で示した。)

しかし、対象人物の視角から構築される物語を組み込んで表現するという手法には、表現上の困難があった。これについて、田中(2016)は、次のように述べる。

〈近代小説〉では固定したキャラクターを創るのではないため、視点人物の内奥から一旦語られれば、

視点人物自身の内なるまなざしを超えて、対象人物を語ることはきわめて困難です。人は相手から語ることは誰も出来ません。(語り手)もまたある人物の内奥に一旦沈み込めば今度はそこから抜け出すことはできない、この不可能性を抱えるのが「客観描写」であり(略=渡邊)(p.6)

「近代小説」の表現上、語り手の語る物語を相対化して読ませるためには、視点人物や語り手の視角によって捉えられた対象人物ではなく、対象人物そのものを描き出す必要があった。しかし、対象人物を視点人物や語り手の視角から描き出したところで、それは視点人物や語り手によって捉えられた自己内他者としての対象人物としてしか描けないという表現上の問題を「近代小説」は抱えていたのである。

この表現上の課題を解決するために「近代小説」では、語り手を超える聴き手と語り手を超える語り手との対話から成るコミュニケーションの場が設けられることになった。これについて、田中(2015)は次のように述べる。

(略=渡邊) 〈近代小説〉の誕生、その神髄は物語る主体を相対化し、その虚偽性を抉り取ってこれを斥け、捉え直す苦闘から何が見えるのか、こう問うところにあると考えます。

我々が見たり聞いたり知覚する領域の彼方、その〈向こう〉をどう捉えるかを問うのであり、了解不能の《他者》である〈言語以前〉を何らかの意味で内に抱え込もうとすると考えます。(語り—聴く)読書共同体の相対化を要します。そこでは物語の〈聴き手〉は語っている主体の〈語り〉に同化して聴きとるだけではなく、これを対象化し、相対化して突きつけ返ししながら、聴き取るのです。(p.30)

対象人物の物語は、視点人物や語り手の視角から表現することはできない。そこで、「近代小説」では、語り手が対象人物の物語を直接表現するのではなくて、読者が、対象人物の視角から構築される物語を聴き取るという形で、これが読めるように表現するという手法がとられた。

つまり、「近代小説」では、語り手の語りをただ聞くだけであった読者が、語り手を超える聴き手となって、対象人物の物語を読み、語り手の語りを対象化・相対化することが期待されるのである。

「近代小説」では、読者が語り手を超える聴き手として、対象人物の物語を読み、語り手の語りを対象化・相対化することができるように表現されているとして、読者がそのように読めるようにするためには、語り手の語りを超えて、読者にことばを届ける主体が必要である。これについて、田中（2015）は次のように述べる。

〈近代小説〉に登場する生身の〈語り手〉を捉えるには、その〈語り手〉を語っている〈語り手〉を超える〈機能としての語り手〉＝〈語り手を超えるもの〉を捉えることを必須とします。（p.30）

つまり、「近代小説」では、語り手を超える語り手が、読者が語り手を超える聴き手として、対象人物の物語を読み、語り手の語りを対象化・相対化させるように語っているということである。これをいいかえれば、「近代小説」では、視点人物や語り手の視角からなる物語を超えて、語り手を超える聴き手となった読者が、対象人物の視角から構築される物語を聴く（読む）ことができるように構造化されているということである。これを図7に示した。

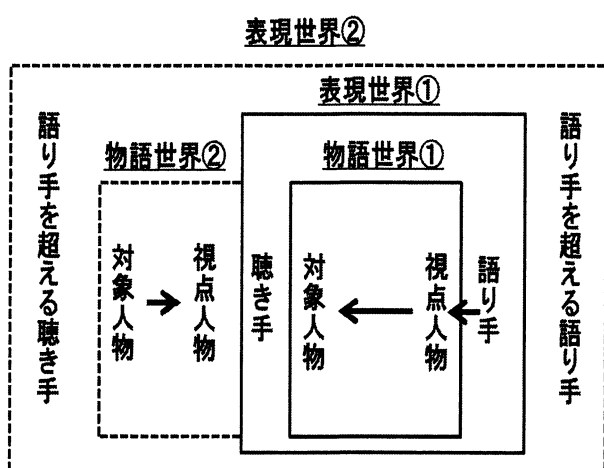


図7 表現世界②

図7では、語り手を超える聴き手と語り手を超える語り手から構築される表現世界を、語り手のいる表現世界と分けるために、前者を表現世界②、後者を表現世界①として表記している。この表現世界②は、語り手を超える聴き手になった読者によって初めて構築される。この特徴から、その領域を破線で示した。

ここまでの田中の言説の整理からは、「近代小説」

は、語り手を超える聴き手となった読者が、対象人物の視角から構築される物語を聴き取り、これによって語り手の語る物語を相対化し、語ることが自己内の物語を語ることでしかないということの問題化するように構造化されているといえる。

ここまでの考察を踏まえて、以下で「近代小説」の基本構造図を作成する。

「近代小説」の構造は、図4で示した文学教材の基本構造図モデルに、対象人物の視角から構築される物語が展開される物語世界②と、語り手を超える語り手と、語り手を超える聴き手のコミュニケーションの場としての表現世界②を加えたものとして考えることができる。これを踏まえて「近代小説」の基本構造図モデルを以下のように作成した。

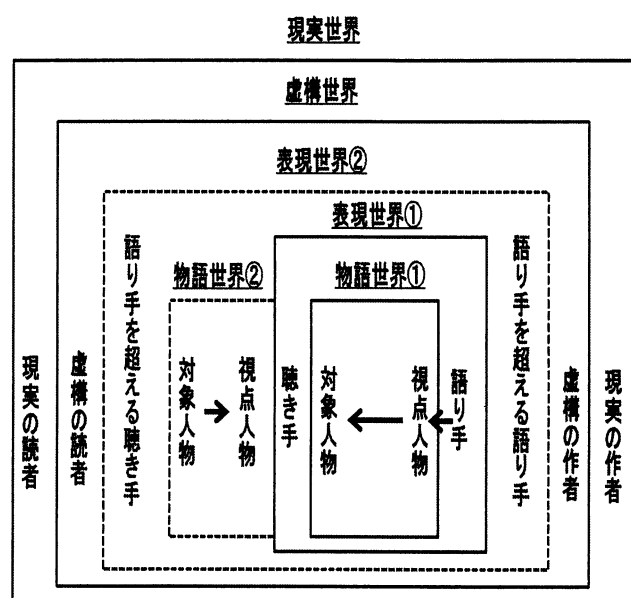


図8 「近代小説」の基本構造モデル

「近代小説」の基本構造を、物語世界①、これを語る表現世界①に加えて、表現世界①の外部に存在する物語世界②とこれを語る表現世界②が存在し、これらの外縁に虚構世界と現実世界とが存在し、重層化されている構造としてモデル化したものが図8である。破線で示した領域は、語り手を超える聴き手によって、構築される領域である。

この「近代小説」の文学教材構造図が、図1から図3までの構造図と異なるのは、表現世界①にいる語り手を超えたところ、語り手の語る領域の外部に、物語世界②があるという点である。また、物語世界②は、語り手を超える語り手と語り手を超える聴き手によ

て構築される表現世界②において、構築されるという点である。

「近代小説」には、表現世界、すなわち、語る・聴くというコミュニケーションの場が、二重に構造化されており、「近代小説」の表現者から、読者は、聴き手として、この二重の語りの場、聴く場を構築することが期待されていると考えられるのである。

ここで、表現世界①における聴き手と、表現世界②における語り手を超える聴き手と差異について、コミュニケーションの形態という点から、より明確にしておく。

表現世界①における聴き手は、語り手の語りから、物語というメッセージを受け取ることになる。この聴き手は、語り手の語りを受容する聴き手であり、語り手の物語（メッセージ）を、できるだけ語り手の語るように（語り手のコンテキストから）受け取ろうとする。

一方で、表現世界②における語り手を超える聴き手は、語り手の語る物語を受容しつつ、対象人物のコンテキストを踏まえた、聴き手独自の視角から、物語（メッセージ）を聴き、これを語り直そうとするのである。

「近代小説」を読む読者になるのは、この二重に重層化された語りの場・聴く場を構築する聴き手なのである。

「近代小説」を読む読者になるのは、語り手を超えて、二重に重層化された語りの場・聴く場を構築する聴き手であり、語り手を超えて、語り手の無意識からの声を聴きとる聴き手なのである。つまり、「近代小説」の構造（「近代小説」の文学教材構造図において点線で囲われている領域）は、読者が語り手を超える聴き手になって読むことで、初めて現象するのである。

作者側から考えれば、破線部の物語世界②と表現世界②は、意図して表現されているものであり、その意味で、破線部は、メッセージとして語られていると考えられる。こう考えると、メッセージを送る主体を指定する必要がある。田中の言説における「機能としての語り手」や「語り手を超えるもの」は、破線部をメッセージとして考えたときに、このメッセージを送るコミュニケーション主体として指定されたものだと考えることができる。一方、これを読者側から考えれば、破線部は、語り手のコンテキストを超えて、対象人物らのコンテキストから、語り手の語り（メッセージ）を聴く、語り手を超える聴き手となった読者によって構築される。よって、読者側から考えた場合、語り手

を超えるものを指定する必要はなくなるだろう。国語科教育の読みの理論としては、語り手のコンテキストとは異なるコンテキストで語りを聴く、聴き手（構造図でいう語り手を超える聴き手）概念の探求こそが、重要な課題となる。

5. 今後の課題

本論で、第三項理論の構造論に基づいて作成した文学教材構造図（図 8）の妥当性を向上させていく必要がある。本論では、理解しやすいように物語世界②を対象人物の視角から見た物語世界であると限定した論述になってしまったが、物語世界②は、これに限定されるものではなく、より抽象的に表現すれば、視点人物の物語世界①を語る語り手を超えた物語世界ともいえる領域である。今後はこのことも考慮する必要がある。

また、渡邊（2018）では、物語世界②を含んで、文学教材を構造化して読むことで期待される教育作用について触れたが、今後は本論の考察を踏まえて、より精緻に文学教材を構造化して読むことの教育作用について考える必要がある。

【引用参考文献】

- 井島正博（1993）「物語と視点」『成蹊国文』第 26 号、17-43.
- 西郷竹彦（2008）「文芸（虚構）の世界～西郷文芸学の展開その 1～」『文芸教育』第 82 号、66-87.
- 鈴木泰恵・高木信・助川幸逸郎・黒木朋興編（2009）『〈国語教育〉とテキスト論』ひつじ書房
- 田近洵一（1993）『読み手を育てる——読者論から読書行為論へ』明治図書
- 田中実（1996）『小説の力—新しい作品論のために』大修館書店
- 田中実（1999）「〈本文〉とは何か—プレ〈本文〉の誕生」田中実・須貝千里編『〈新しい作品論〉へ、〈新しい教材論〉へ 1—文学研究と国語教育研究の交差』右文書院、243-282.
- 田中実（2006）「断想Ⅲ—パラダイム転換後の文学研究・文学教育の地平を拓く—」『日本文学』第 55 巻第 8 号、61-73.
- 田中実（2009）「「近代小説」が、始まる—〈知覚の空白〉、〈影と形〉、〈宿命の創造〉—」『日本文学』第 58 巻第 3 号、57-68.
- 田中実（2015）「現実とは言葉で出来ている—『金閣寺』

- と『美神』の深層批評― 『都留文科大学研究紀要』
第19集, 25-59.
- 田中実 (2016) 「〈自己倒壊〉と〈主体〉の再構築―
『美神』・「第一夜」・『高瀬舟』の多次元世界と『羅
生門』のこと― 『日本文学』第65巻第8号, 2-15.
- 田中実 (2017) 「〈第三項〉と〈語り〉 / 〈近代小説〉
を〈読む〉とは何か― 『舞姫』から『うたかたの記』
へ― 『日本文学』第68巻第8号, 2-14.
- 田中実・須貝千里編 (2001) 『文学の力×教材の力 理
論編』教育出版
- 田中実・須貝千里・難波博孝編著 (2018) 『21世紀
に生きる読者を育てる 第三項理論が拓く文学研究/
文学教育 高等学校』明治図書出版
- 中村龍一 (2012) 『「語り論」がひらく文学の授業』
ひつじ書房
- 難波博孝 (1995) 「テキストと読者との対話のために
―読者論と言語論の豊かな出会いに向けて―」田近洵
一・浜本純逸・府川源一郎編 『「読者論」に立つ読み
の指導 中学校編』東洋館出版社, 175-189.
- 浜本純逸 (1988) 「説明的文章の構造と文学作品の構
造」『国語科教育』第35号, 28-35.
- 松本修 (1997) 「文学教材の〈語り〉の分析について」
『上越教育大学研究紀要』第17巻第1号, 147-159.
- 山元隆春 (2005) 『文学教育基礎論の構築―読者反応
を核としたリテラシー実践に向けて―』溪水社
- 渡邊皆仁 (2018) 「第三項理論と国語教育についての
緒論」『国語教育思想研究』第16号, 45-52.